『仁勢物語』と『伊勢物語』

――関係性から欲望へ

田川邦子

(一)

仮名章子『仁勢物語』について論じたものはあまり多いとはいえないし、またその論じ方の傾向もなんとなく定まっているように思われる。

『仁勢物語』は『伊勢物語』のパロディであるから、なにを措いても『伊勢物語』をどのような意識のもとに、どのような方法をもって書き換えていったかということが、重要な議論になってくるのは当然である。どの論もこれをとり外しては成り立たないがために、答えはともすればありきたりのものになりがちなのだ。

つまりこの作品は作者の意識や方法から見れば、読者にはすべてが見え透いていて、未知の部分や謎めいた所が少なく、魅力に欠けるように感じてしまうところがあるのではないかということである。果してそうなのかどうか、それを考えてみたいというのがこの小論の狙いである。

まず手法としての「もじり」である。

「もじり」の手法は、『伊勢物語』全段百二十五話を『仁勢物語』に移し換えるとき、すべての段でとられる手法であるから問題にしないわけにはいかない。どの言葉をどういう方向に狙いを定めて「もじる」のか、成功すればどうなるのか、失敗すればどういうことになるのか、百二十五段すべてに当ってみなくてはならないだろう。

笑話を分類して項目を立てたのは安楽庵策伝の『醒睡笑』（一六二八〈寛永5〉年）であるが、全八巻四十項目の分類の中に「かすり」（巻の八）というのがある。この「かすり」がつまりは「もじり」や「語呂」にもっとも近いものであることは、そこに集められた笑話を見れば分る。

しかし策伝の分類は基準の立て方に矛盾や混乱があり、「もじり」や「語呂（合わせ）」的手法の笑話は、他の項目の中にも至る所に見られるからこの巻だけのものではない。

「謂へば謂はるる物の由来」（巻の一）、「落書」（同）、「祝ゐ過るも異な物」（同）、「名づけ親方」（巻の二）、「文字知り顔」（巻の三）、「不文字」（同）、「文の品々」（同）、「思の色を外にいふ」（巻の七）、「言ひ損はなをらぬ」（同）「謡」（同）、「舞」（同）、「頓作」（巻の八）、「平家」（同）、「しうく」（同）、「祝済た」（同）等々。およそ言葉による表現の世界には、笑いの種になる誤解や言い間違い、あるいはそれらを逆手にとる曖昧性の中に、相手を煙に巻いたり感じ入らせたりすることはいくらでもあり得るわけだ。もじりや語呂、かすり、しゃれ、地口の素材は世の中に掃いて捨てるほどあり、笑話はこれらの徴候に特に敏感な関心を示す。

しかし策伝がこの点に関しては「かすり」一つを項目としてあげるのにとどめ、あとは「謡」「舞（曲）」「平家」などジャンル別、あるいはテーマ別にしたのは賢明なやり方であった。『醒睡笑』の魅力はこういう不徹底な分類そのものの中にあり、型・手段など方法として意識化されたものは逆に前面に出さないのである。あくまで日常や現実、または趣味や芸術文化など生きた実社会の側面を通し笑いを観察しているのが特徴である。

これに対し『仁勢物語』は「もじり」という意識化された方法をもってあからさまに笑いに挑む。百二十五話のすべてがそうであるから読むうちに作者の手法が見え透きそのワンパターンに飽きがきて、辟易してしまうところがある。しかも『伊勢物語』についてひと通り以上の知識がなければ面白くないし、充分な理解の域に到達できない。すべての和歌は狂歌に作り替えられるから、元の和歌について知らなければ面白味もまた半減してしまうだろうと思われる。「もじり」の方向性、その狙いとするところは、『伊勢物語』に描かれる貴族社会の優美で洗錬された精神性や、男女の恋を始めとする人間関係のありよう、趣味性豊かな生活を、「今」の時代の卑俗卑賤のレベルに堕して見せることにあった。

そのようなことをして何の意味があるのかという疑問もあるだろうが、これも時代精神のなせる業である。卑俗なものに宿る生命力に新しい可能性を見出すことが可能であれば、人々の関心はそちらに傾く。やがて登場する世之介（『好色一代男』）も、光源氏の卑俗化、パロディであるが、このような傾向はすでに近世の初期から始まっている。

(二)

卑俗化のありふれた手段として、初段からとにかく飲食に関する話の多いのが目立つ。

「うひかうぶり（初冠）」して、平城の京・春日の里」に狩りに出掛けた男が、「いとなまめいたる女はらから」を垣間見、心を乱すという初段を見てみよう。

「平城（奈良）」へ行く目的を「狩」から「酒飲み」に転じたのは、中世以来奈良の酒は有名で、近世になってからは上質諸白の産地として知られていたからだ。次に「なまめいたる女はらから」を、「生臭き魚、腹赤（鱒）」ともじり、この段を飲食の話にしてしまう。

奈良酒を持ち出したことでこの段は現代との接点が確保され、「道すがら／しどろもどろ足元は／乱れそめにし／我奈良酒に」の狂歌も生きてくるのである。

奈良酒（奈良諸白）は七六段にも出てくる。

『伊勢物語』では、二条后が東宮の御息所と呼ばれていた頃氏神に

詣で、近衛府の翁（在原業平）に禄を給わり、これに対し翁が一首を詠んだとする話である。「大原や／をしほの山も今日こそは／神代のことを／思ひいづらめ」というのがそれであるが、この一首には業平と二条后の秘められた愛の関係性が隠微に漂っている。

「二条后のまだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに」（『伊勢物語』）を、『仁勢物語』では「をかし、男、二条通より、御霊宮の氏神の祭見に行きけり」ともじり、相手の女性（二条后）を欠落させ、男一人の祭り見物とした。近衛町（「近衛の翁」のもじり）で地元の公家の酒振舞に会い、「大原や／おつけの椀に／今日こそは／奈良諸白を／思ふまま飲む」の一首を詠じるが、恋の関係性は消滅し、男一人の飲食の快楽を語る話にさま変りしている。

『伊勢物語』は人間の関係性のさまざまを描くことに専念しているところがある。若い男女、夫婦、主従、友人などさまざまな人間関係が、在原業平とおぼしき一人の男を通して浮かびあがる。交わされる和歌は多く謎かけの構造をはらみ、暗示的で、そこに新しい意味を発見しなければならない。これは王朝時代の贈答に共通するのだが、言葉と意味内容の落差がはらむ微妙な空間に、関係性が内包する心理的屈折を読み取らねばならないものが殆どなのである。

このような表現手続を通して描かれる関係性を、貴族的といってよいかどうか分らないが、かなり上質のものであること確かである。パロディ『仁勢物語』はその深部に降り立つことは殆ど不可能なので、というよりそれを意識すればパロディ化は不可能であるから、逆に関係性を毀ち崩すことに躍起になることで、道を開こうとする。それは言葉によることばの破壊であり、具体的方法としてはもじり、「語呂」、さらにこれに連想が加わる。

とにかく食べ物と病気の話が多いことは先にも記したが、それも上等の食品・料理ではなく、病気も人の嫌がる病、皮膚性、性病などが目立つ。これにより、身体性と欲望の露わな世界を前面に押し出し、洗練された貴族文化を支える上質の関係性との落差を楽しむ構図なのである。

『伊勢物語』四十五段は親にかしずかれ大切に育てられていた娘が、ひそかに恋をしていた男に想いを告げる機会もなく、焦れ死にをしたという話である。息を引き取るときに初めて本心を親に打ち明けたので、すぐ男に知られせてやったが、男が駆けつけたときには、娘はすでに死んでいた。

こういう際には男もまた女の家で喪に服すのが、当時の関係性の在りようであった。死のけがれに触れたというのが、第一の理由ではあるだろう。しかし穢れ説で割り切れるほど単純ではない。懸想されたということは精神的な関わりを持たされたことであり、それに何らかの答えを出さなければ、関係性は宙吊りになったままである。服喪はこういう場合の答えの出し方でもあるだろう。それを怠れば霊魂の祟りも恐しい。或は愛子を失った親たちへの同情、儀礼もあるだろう。

場違いの所で服喪している男の微妙な心理を、『仁勢物語』の筆者は一種の戸惑い、喪失感と受け取ったかどうかは分らない。病のため食べたいと思っても食べられない、食べられないが故にますます食への執着をつのらすという話に転化してしまったのだ。

もじりの要点は「いかでこの男にもの言はむと思ひけり」（『伊勢物語』）を、「いかでこの永き日に、物食はんと思ひけり」（『仁勢物語』）とし、「死ぬべき時に、かくとこそ思ひしかと言ひけるを」

（『伊勢物語』）を、「死ぬべき時に、膈と云ふ病者と思ひしか」（『仁勢物語』）としたことにある。「膈」は胃癌であり、物が食べられない病であることから、余計食物への妄執がつのるのである。医者は登場するがそれもほんの僅かで、焦れ死をした娘やその親たちなど、原話の関係性は脱落し、一人の男の病と食欲の話のみになる。

「ゆく蛍／雲のうへまで／去ぬべくは／秋風ふくと／雁に告げこせ」（『伊勢物語』）は、狂歌「青穂蓼／雲の上まで／茂るとも／生成鮨に／交ぜられもせじ」となり、さらに「食ひ難き／夏の冷飯／思ひやれば／その事となく／腹そひだるき」ですさまじい食への執着なのである。かくてこの段は百二十五段中、最も『仁勢物語』らしい作品といってもよいかもしれない。

(三)

次に「金」がどのように扱われるかも、興味のあるところだ。

当然ながら『伊勢物語』には金の話は出て来ないが、『仁勢物語』にも「金」の話はそれほど多いとはいえない。百二十五段「つひにゆく／道とはかねて／聞きしかど」（『伊勢物語』を、「終に行く／道には金も／いらじかと／昨日経読む／僧に呉れしを」も、とりたてて言うほどのことはないであろう。このように「金」は、とりたてて言うほどもないような使われ方が多く、欲望の対称としての「金」が見えてこないのは、近世の作品としては少しばかり意外なところである。

『伊勢物語』十段は都から武蔵国まで旅をして来た男（在原業平）が、そこで一人の娘と結ばれる話である。娘の父親は土地の人なので、都の男には興味を示さず、娘を別の男（おそらく土地の人間）と結婚させようと考えているが、母親は藤原氏の出身なので、都会の雰囲気を漂わせる高貴な男に好意を持つ。そこで「むこがね」に歌を贈るのだが、この「むこがね」が「金」を引き出すもじりの要で、全体が金をめぐるやり取りの話に展開する。

『仁勢物語』では父親の性格は「また人」（純朴で正直な人、『伊勢』の「こと人」のもじり）である。母親は立腹で怒り易い外向的な性格だとしている。この父母の性格を描き分け、外向的な母親は頭者（ずうずうしい無鉄砲な性格）の娘婿に好意を持つ。それをよい事に婿は義母から金を借り返さない。そこで借金返済の催促に一首を贈ることになる。

「三吉野の／田面年貢を／乞はるるに／君が借りたる／金返せかし」がそれで、「みよしのの／たのむの雁も／ひたぶるに／君がかたにぞ／よると鳴くなる」（『伊勢物語』十段）をもじった狂歌である。

古典的な関係性を新しい（近世的）関係性に置き換えて成功している一話といえる。

『伊勢物語』では男（在原業平）と藤原氏の関係は微妙である。実在の業平は平城天皇の皇子阿保親王の子であり、妻は紀有常の娘である。有常の妹が宮廷に入って産んだ惟喬親王と業平は深い関係にあったらしい。皇位につく資格のあった惟喬親王を疎んじたのは藤原氏であるから、業平の藤原氏に対する感情が如何なるものであったか、後世の人にも想像はついた。『伊勢物語』には「藤原」の言葉は何度か出るが、その度にそこにある種のわだかまりが漂うのを感じるのも気のせいではないだろう。

この第十段の藤原氏出身の母親に贈る婿（業平）の返歌も、何か

形通りで無表情である。原作のそのような微妙な部分に『仁勢物語』の筆者が注目していたとは思われないが、これらの微妙な関係性を別の新しい関係性に移植できたのは、ひとえにもじりで〈金〉なる言葉を引き出したことによる。

『伊勢物語』五十二段は五月の節句に粽を送られた男が、そのお返しに狩りの獲物の雉子を添えて一首を送る話である。歌は「菖蒲(あやめ)刈り／君は沼にぞ／まどひける／我は野に出でて／かるぞわびしき」である。粽に使う菖蒲を刈りに沼に出た友人に、自分は雉子を狩るために野に出たと、「刈る」と「狩る」の同音をきかせつつ、端午の節句の行事を共にできなかったことを嘆いたものであろうか。

『仁勢物語』は右の一首を「粽買ひ／君は銭にぞ／まどひける／我は田に出でゝ／取るぞわびしき」として、田螺(にし)を返礼に送ったとした。

当時も端午の節句の粽は多くは自家製であったと思うが、一方では商品化も盛んに行われる時代である。『仁勢物語』では「内裡粽」を買って送って来た友人に対し、自分は銭がないから買った品物は送れない。それで田に入り螺を取って送りますというわけである。「田螺」がいかにも田舎臭くて庶民的である。「内裡粽」は宮廷にも献上される高価なものであるから、代金の工面で貴方は苦労されたでしょう。それに対し私は田螺を取るのに田に入り、やはり大変でしたというわけである。このコントラストが面白い。手造り粽を商品化した「内裡粽」にもじったところから、「金（銭）」を引き出したのである。

『伊勢物語』の「むかし、男」には、心を寄せても想いの叶わぬ高貴な女性二条后と伊勢の斎宮がいた。七三段は「消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひ」一首詠む話であるが、これは伊勢の斎宮を指している。『仁勢物語』ではこれを「貰はれもせざる御納戸の金を思ひける」としたのは、共に手に入り難いという共通性から、「（高貴な）女」を「御納戸の〈金〉」にもじったのである。このような発想の中にこの筆者の〈金〉に対する感覚、ひいてはその身分や所属階層などが見えてくるように思われる。

西鶴が町人物、近松が世話物で克明に描く金銭をめぐる人間の欲望と熾烈な葛藤は、新しい商業資本社会に必然的に生じて来た人間状況から派生するテーマであったが、時代を四十年溯ることを条件に入れても、『仁勢物語』の筆者の金銭感覚は、社会の無風地帯に棲息するかのように、何かのんびりしたところがある。筆者は姓名や身分を定かにしないが、おそらく士太夫階級に属する人物ではないだろうか。

それは撰金禁止命を利用し、「色このみなりける女」（『伊勢物語』三十七段）のもじりとして、「銭撰りける女」を登場させることにも言える。

寛永年間幕府により度々発令された銭撰りの法度は、悪貨を拒否する当時の商取引の風潮を、法令で取り締るもので、犯せば厳罰に処せられた。

色好みの女の浮気を心配する男が送る一首に、女が返歌をし、「浮気はしません」と応じた『伊勢物語』を、「一人では銭を撰ることはしません」と応じたとするのが『仁勢物語』である。一人では銭撰りはしないが男と二人なら法を犯すつもりなのかと問い返したくもなるのがこの段で、窮極には言わんとするところがはっきりしない。筆者の金銭への関心には現実感を欠くところがあり、視点が

定まらないのである。「銭撰りの法度」は、ただ、「今」を表現する社会的事件の一つという認識の程度である。

そうしたなかでパロディとして成功しているのは十二段である。『伊勢物語』十二段、「武蔵野は／今日はな焼きそ／若草の／つまもこもれり／我もこもれり」の「こもれり」を「ころべり」にもじり、全体を吉利支丹の御法度に絡む話に作り変えた。「転ぶ」は、キリスト教を捨てて改宗することを指す当時の用語であるが、同時に「な焼きそ」から、キリシタン処刑の火刑を連想することで、なまなましい現代ニュースによる古典の書き変えとなった。

キリシタン弾圧は慶長年間から再々繰り返されてきたが、寛永十五（一六三八）年にも、江戸で大がかりな処刑が行われている。『仁勢物語』成立の時期については、野間光辰がつとに指摘したように、寛永十五（一六三八）年から同十七年と考ええれば、時期は一致する。

肥前島原の乱が導入されるのは三十三段である。これは通って来る男がこれを最後にもう再び来ないだろうと察している女がいて、その件りの表現を「このたび行きては、または来じ」（『伊勢物語』）とあるのを、「生きては又帰らじ」に転じて出陣を控えての男の様子とした。たった一つの言葉が決定的意味を持たされ全世界が変転する例としては先の「ころべり」にも通じ、パロディの手法としては納得のいくものだ。

(四)

パロディとは「与えられている表現以外のある種の表現が連想されるという〈テクスト間相互関連性〉を前提に、連想されるテクストとの対比関係の上に成立する伝統的な形式」（池上嘉彦『詩学と文化記号論』）であり、『仁勢物語』の筆者はこの〈相互関連性〉を「ごろ」の上にまず置いた。指向する対比関係は「雅び」に対する「卑俗」であり、「昔」に対する「今」である。

当然のことながら『伊勢物語』には男女の愛の関係性を描くものが多い。卑俗性現代性を指向する折、その大半が病や飲食の話に書き変えられるのは、当時の庶民の日常ではこれらが最大の関心事であったからに違いない。その際原話中に保たれていた関係性が消滅し、欲望の世界に単純化されてしまうのである。

反対にパロディとして成功しているのは、先にも述べた通り、飲食や病のような安直卑近なもじりや連想を避け得た場合が多い。

最も長い六十五段の「在原なりける男」と二条后の恋物語は、大傾城屋の高級遊女と金持町人の恋物語に作り変え、ほぼ成功している。六十九段「むかし、男」と伊勢の斎宮の恋物語は、禁を犯しての恋愛を、博奕のテーマに転化した。当時博奕は禁制で、人目を忍んでやらなければならなかったから、禁制の恋物語をパロディー化するには、相応しい題材であったといえる。

これらはもじり、語呂以前にまたはほとんど同時に、両物語の底流に何らかの意味の共通性を発見するところから連想が成り立ち、筆者は言葉と格闘しながらも、それに導かれて割合のびのびと筆を進めている例である。

しかし恋愛以外の別の関係性をパロディ化する場合はどうなるか。例えば三十九段、七十八段、八十七段、百一段など、筆者は逐語的に最後までもじりや語呂を重ね、言葉と大格闘を演じるのであるが、結局破綻してしまう。筋としての話は存在するが共感を生むに至ら

ないのは、新しい関係性を創造できずに終ってしまったからである。

紙幅に余裕がないので詳しくは触れられないが、例えば『伊勢物語』百一段、在原行平の家によい酒があるというので、左中弁藤原良近を主客にして客人を招き宴を開いた。瓶に藤をさし、それを題に歌を詠むとき、行平の弟の業平がやって来たので一首詠ませたという話である。主客も藤原、瓶にも藤の花である。業平の一首が注目されるところである。業平の歌は「咲く花の／したにかくるる／人おほみ／ありしにまさる／藤のかげかも」というのであった。

酒宴の話であるから『仁勢物語』の筆者にも好都合で、そのまま酒席の話にし、歌は「酒瓶の／側に並べる人を多み／蟻の熊野へ／参るなりかも」ともじった。歌の心を問われたときの業平の答えは「（前略）藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」なのであるが、『伊勢物語』では「藤絡げの酒林を思ひて詠める」である。この「藤絡げの酒林」が分らない。実際にモデルがあったのか、それとも筆者の〈奇想〉の一種なのか。頭を抱えたまま稿を終わるのは残念であるが、『仁勢物語』には、このような意味不明の話も結構少くないのである。

使用テキスト

『仁勢物語』日本古典文学大系『仮名草子集』（岩波書店）

『伊勢物語』新潮日本古典集成『伊勢物語』（新潮社）

雑誌受贈リスト　①

鶴見日本大學 創刊号・第2号（鶴見大学院日本文学専攻）

鶴見大学紀要 第35号（鶴見大学）

二松学舎大学人文論叢 第60輯（二松学舎大学人文学会）

梅花女子大学文学部紀要 31（梅花女子文学部）

滝川文藝 九号（國學院短期大学）

滝川国文 第14号（國學院短期大学国文学会）

国文学研究 第百二十五号（早稲田大学国文学会）

日本語研修センター報告（vol. 6）（大阪樟陰女子大学 日本語研修センター）

横浜国大国語研究 第16号（横浜国立大学国語国文学会）

聖徳学園岐阜教育大学国語国文学 第17号（聖徳学園岐阜教育大学国語国文学会）

日本文藝研究 第五十巻 第一号（関西学院大学日本文学会）

仁愛国文 第15号（仁愛女子短期大学国文学会）

風花 第3号（仁愛女子短期大学国文学科郷土学研究センター）

語文 第百一輯（日本大学国文学会）

明星大学研究紀要 人文学部 第34号（明星大学人文学部）

大妻女子大学大学院 文学研究科論叢 第八号（大妻女子大学大学院文学研究科）

国文研究 第四十三号（熊本県立大学国文談話会）

新潟産業大学人文学部紀要 第7号（新潟産業大学附属研究所）